
サバゲー & 放送部 ~ サバ味噌定食 ~

霊剣荒鷹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サバゲー&放送部 〜サバ味噌定食〜

【Nコード】

N3564V

【作者名】

霊剣荒鷹

【あらすじ】

放送部。何時もと同じ夏休みを過ごしていたある日、急に部長である長瀬 茂が呟いた。「サバイバルゲームをしよう!」……いや、宣言するように立ち上がった。奇想天外な部長のハチャメチャをちょっぴり楽しく思える部員達の物語? 『あらすじとタイトルにツッコミ入れたらアウトです』

登場人物が増えるか分からないがその1

【！注意！】

荒鷹自身にエアガンの知識は全くないので、装弾数とか色々おかしいですが、

「あゝこんなもんなんだ」

で納得して頂けると嬉しいです。

Wikiを利用した知識なので、BB弾50発は入るマガジンに30発しか入らなかったりします。

（ここに出てくる遊戯ガンはちょっと特殊です）

1【長瀬 茂】ボケ

学園3年。放送部部长。男性。

長身でスラっとした姿に学園の中で隠れファンが多数存在する。

成績は悪いが、授業はまじめに受けているので総合的な成績は普通。夏休みのある日、ふと思った事を口にする。

サバゲーの銃を知り合いから借りたり、変な……いや、おかしい友人が沢山居る。

使用武器

・SCAR-L 30発

・グロック18C 17発

値段の高い武器の方が最強だろ？ 思考。

2【長瀬 真尋】ツッコミ兼ボケ

別に付けやすい名前だから付けた……訳じゃ無いんだからね！

学園1年で茂の妹。同じ放送部に入るが断じておにいちちゃんっ子で

は無い。

眼つきが悪く、気がきついと見られるが、本当は素直で優しい女性。見た目と性格のギャップがありえない、酷い言葉が似合う優い子。胸の大きさが小春レベル+1。（下に掲載）

（使用武器）

・M93R 20発

・デリンジャー 2発

3【手塚^{てつか} 行人^{いくと}】常識人だが、天然学園2年男性。

狐が好きなのか妖狐が好きなのか……うん、金色の毛並みは美しいから許す。

荒鷹も中学の文化祭で、大きなパネルに九尾を描きました。（黄組って班分けだったので）

男性でありながら、少女のような綺麗な声帯を持ち、放送のアナウンスをよくしている。

余談だが、

運動会でのアナウンスの応援（赤組がんばって、など）で最下位のチームがその科目で1位を取ったらしい。

所詮、男の娘。手塚だが有名な漫画家ではない。

女の子に見えないように、ボーイッシュな格好で出かけるなどの工夫をしている。

（……だが、それが+になる。男装している美少女な感が増大する）

（使用武器）

・VZ・61 20発

・コルトパイソン 2・5インチ 5発

4【石田^{いしだ} 玉緒^{たまお}】天然ボケ

プログラミングが得意な学園2年生。あ、男性です。

行人と古い友人であり、一緒に歩く姿も見れる。通称タマちゃん。

空腹キャラで行動の8割が食べ物に釣られている。

柔道の有段者で、行人に群がる変態を右腕だけで片付けてきた実力。空腹キャラだが、デブではなく美形。まさしく『俺の胃袋は宇宙だ』戦闘スキルは無駄に高い。たびたびその容姿、運動神経にて他の部がスカウトに来ている。

〈使用武器〉

・M16A2 ゴルゴカスタム 20発

・デザートイーグル 7発（.50AE）

5【佐久川 聡史】ツツコミが出来るがあえてボケに入る

学園3年男性。部長と同じ学年だが、クラスは違う。通称サクサク。楽しい提案にはすぐ乗るが、責任を負わないように隠れる腹黒系。眼鏡を掛けているがコンタクトでも可能。愛読書は『孫子の兵法』学園の方針として部活は強制なので、読書が出来て自由な部活を選んだらここになった。本人は満足している。

〈使用武器〉

・G36C 30発

・ベレッタ92F 15発

・CZ75 15発

6【日和 小春】天然

学園1年生の女子。行人よりもっと小柄。泣き虫。

真尋とクラスメイトであり、部活を迷っていた所と一緒に放送部へ入部する。

小動物チックで、ある人は子犬。ある人は子うさぎ。ある人は子リスと呼ぶ。

先輩である行人の指導にて上達中。それでも人前ではあまり喋れないが……

今回は怪我をした時の保健係として、サバイバルゲームには参加しない。

何故か部室で、『メイド』の格好で待機されている。

胸が無い事にくよくよ中。母にまだ早いと言われてくよくよ中。それでも成長する事を信じて頑張ってる。(レベル3)

学園1年女子の平均は(レベル15)程度。

真尋、小春共に、初期ボールなモンスター以下のレベルだった。

ちなみに一番原型を留めていない名前です。ヒントワードは【穏和】
【穏やか】

7【アルメソ(あるめそ)】 ギャグ

部長が友人から受け取ったロボット。性格は男。

昔のブリキロボットのような格好をしているが、

・6桁の掛け算を得意とする。

・腹部に電子レンジがある。

・動力源は12Vバッテリーである。

・サブは単四電池2本である。

・水も沸かせますし、火もおこせます。

……と、凄いのか凄くないのか微妙なロボット。でも凄い……のか？
勿論サバゲーには参加する。M1887でのターミネーターコッキング(アルメソ命名)を得意とする。

使用武器)

・ Winchester M1887 5発

・ GE M134 100発

8【齊藤 翔】

真夏なのにマフラーを愛用する変な3年生。男性。

暑っ苦しい格好も、彼の顔を見れば爽やかになる。……男子除く。

放送部ではなく、生徒会会長に就任している。

放送部部長である長瀬 茂とは古い付き合いがあり、たびたび起こす無茶な事を苦笑しながらも後片付けを受持っている。良い人だー。

サバゲーには参加しない。

【部長の古い友人】

数多く存在します。

科学者だったり、研究家だったり、冒険王だったり、海賊王だったり、石油王だったり、女王だったり…etc
別次元の人が数多の星のように居ます。

無理な事が何でも出来る無茶な人達です。

登場人物ゝ増えるか分からないがその1ゝ（後書き）

人名が足りませんので、最悪部員Aとか居ます。

チラッと読んで興味を持った方は名前を貸して頂けますか？

今ならツッコミが出来る方を募集中です。……とか言ってみる。

第1話・部長の呟きから始まる物語

部室の窓からは真夏の日光が降り注ぐ中、部員はせっせと原稿を考
える。

その中、放送部部長の肩書きを持った長瀬 ながせ 茂 しげる は呟く。

「……そうか」

「部長、どうしましたか？——って、雑誌なんて読まずに仕事し
て下さい!？」

「サバイバルゲームをしよう!!」

そして部長は、決心して宣言するように立ち上がった。

その目には先ほど「ダлуй」と座っていた部長の目ではなかった。
まるで漫画の主人公のように、修行して強敵に立ち向かうような未
来を持った目をしていた。実に無駄である。

急な発言に部員は呆然と部長を眺める。その中には『?』を浮かべ、
話を通じていない者も居た。

真夏の五月蠅いセミの鳴声がいっそう大きく聞こえる。

「……リトバスの恭介みたいな事言い出して…どうした？」

「こいつ馬鹿だ! ……って私は言えば良いのか？」

久川 さくがわ 聡史 さとし は読みかけの本を閉じて、ため息をつく。

部長へと指を指す女性、部長の妹である長瀬 ながせ 真尋 まひろ は、聡史の発言
に、口に出しながらも確認する。

扇風機は一台しか無く、皆は汗を掻いている。

「また学園側から非難がきますよ…」

「気にするな。学園に縛られるようじゃ、今の少ない青春を満喫できないさ」

その中1人の少女は、苦笑いのような顔で部長へと注意する。

手塚^{てづか} 行人^{いくと}は、部長のお馴染みの言い訳を聞いて、再び苦笑いで誤魔化した。

ちなみにどうでも良いが、男である。詳しい情報が知りたい人はどうぞ。

「と、言う事で始めるぞ」

《始めると言いましたも……素手で戦うつもりですか?》

放送部所属の20世紀風のブリキロボット、アルメソが機械音声で尋ねる。

部長の友人から引き継いだ物で、ハイテクノロジー(?)な人口知能を持っている。

屋外での予備スピーカー、壊れた時の予備スピーカー、バッテリー上がりの時の予備バッテリー、後は電卓、電子レンジと無くてはならない物になっている。

アルメソの腕はアームになっており、素手だけなら恐らく勝てる。

「でしたら……タマちゃんが優勝ですね」

「……ん? 何の話か分からないが頑張るよ」

しかし、この部活には最強の人物が居る。いや、学園最強かも知れない。

行人からタマちゃんと、雰囲気と似合わない愛称で呼ばれて起きた男性。

石田^{いしだ} 玉緒^{たまお}は、部長の話を聞いていなかったらしく、返事を返したら再び眠りについてしまった。

彼は柔道の有段者であり、喧嘩無敗の歴史を持っている。

数多の挑戦者を片腕だけで葬り、付いた二つ名が——『隻腕の龍』
『腹ぺこちゃん』『姫騎士』

「サバゲーだつて言うぐらいだから心配するな。エアガン、電動ガンなどは友人から借りてくる」

「で、でも……危ないですよ……」

突然ひつぱられ、部長は下を向く。

そこには部活一優しい性格の日和ひわ 小春こはるが涙目で部長の服の裾を掴んでいた。見上げる体勢なので自然と上目遣いになっていた。

茂はその動作にキュンときながらも、自分より数十cm低い彼女の頭を撫でながら安心させる。

——と、同時に小春が妹に奪われる。

「ふえ……まーちゃん？」

「小春、変態に触られたらその部分から腐るから気をつけた方が……
はあはあ……」

「待てい!？」

撫でられた場所を念入りに撫でる真尋の目は危ないように見えた。それよりも妹に変態扱いされたのが気に喰わなかったのだろう。

「……とにかく、遊ぶのは作業が終わってからにしましょう」

外にも数名部員が居るが、代表して部員Aが騒がしくなった部室をしめた。

「——つて、僕は部員Aなんですか!？」

「良かったじゃないか……俺なんて名前も出なそうだから……」

そんな部員Aの肩に手を置く1人の哀愁漂う男性が居た。

「オーライオーライ……オツケだ」

部長が先導し、学園の前にて一台の軽トラが止まった。

幌が張っており、後ろに詰んでいる物がエアガンなのだろうか？
と思う者も居る。

運転席から降りてきたのは、不精ひげは生やしたおじさん。

小春が小さい声で『三国志の張飛』と言ったのは気にしないでおこつ。

「久しぶりだな茂！ 物は最高級な物を持ってきた。好きなの使ってくれ」

「ああ、すまん。それじゃ頼む」

「おう！ 中に銃が入っている。好きなの持っていてくれ」

そういつて幌の中を案内する。

案内されて最初の声は――、

「凄い……」

壁にびっしりに飾られた銃の数々。

それにおいて、窮屈感が無いように芸術が溢れている並び方に心を奪われた。

隅に置かれた木箱には『BB・2g』『BB・25g』と書かれている。まるで移動販売店のようだ。

「茂、今回はあいつに頼んで特殊な弾を用意した」

「……何から何でも悪いな」

特殊な弾。

今回のサバゲーでは顔に傷をつけてはいけない女性が多数居る。

その中野郎共が使う一般の物と同じ物を使って、怪我をしたら冗談ではすまない。

よって、彼とは違う古い知り合いに冗談半分で作った弾を用意してもらった。

——その名も【塩】そのまんま塩。

特殊な製造で一定の衝撃が加わると拡散する『これでノーベル賞とれるんじゃない？』の傑作品。

銃のメカニズムの衝撃には耐えられても、射出された塩の運動エネルギーがぶつかる事によって拡散する。

当たってもどういう仕組みか分からないが、痛くないらしい。

『MINIMI M249（6500連射マガジン）による超近距離射撃にて実験済み』

万が一手が滑って普通に落としても、拡散しないので安心。しかも塩なので環境にも優しい。ヒットしたら塩が付くので分かりやすい。

「茂のはこれで良いんだろ？」

そう言つて古い友人が助手席から取り出した二つの銃。どうやら予め用意していたらしい。

それを受け取ってから、茂はニヤリと口元を歪める。

「やっぱ、値段の高い武器の方が高性能だろ？」

『SCAR-L』

実銃はM4カービンに性能で負けていたが、こちらは遊戯ガン。

次世代電動ガンとして設計され、新金型として実銃と同じ重量になっている。

流石。イ製の電動ガン。……びくもしないぜ。

その他にはサイドアームとして、グロッグ18Cを選んだ。

ハンドガンにしてはフルオートでの射撃が可能な為、必需品としてよく使われる。

無論、サバイバルゲームなんてした事も、銃の知識も無いメンバーは分からない。

「私は……これにしよう」

トラックの方でワイワイしていたが、真尋が手に取った武器は『ベレッタM93R』。

18Cと同じくフルオートでの射撃が可能な対テロ用マシンピストル。

力の無い女性には制御し辛いがそれは実銃。電動ガンでは難なく制御可能。電動ガン凄いです。

ついでに誰にも気付かれないように、デリンジャーを手にしていた。胸が小春レベルだが、恐らくそこに挟まないので問題ない。

「それじゃ、僕はこの銃かな？」

行人が手にとった武器は『サソリ』の名で有名な『VZ・61』。

ストックが前方に回転して畳み込むため、サソリに似ている所からそう呼ばれる。

VZ・61以外にも小さな銃としてコルト・パイソン——2・5インチを選んだ。

2・5インチは、刑事ドラマの私服警官が使う拳銃。

『あぶない刑事』とかでよく見かける銃であり、子どもの頃『鷹山敏樹』が格好良くて私は好きでした。

「……私はこれでいい」

「——それで良いのか？」

「……問題ない」

タマちゃんが適当に手に取った武器を見て、茂が驚愕する。

「一見普通のM16A2だが、『M16A2 ゴルゴカスタム』と言うスナイパーカスタムに施された一品なのだ。

内部のメカニズムも古い知り合いの特注であり、精度の良い銃になっていた。

物陰から目を光らせて、無愛想に引き金を引く姿をイメージして、

茂は冷や汗を流す。

恐らく、一番の強敵なのかも知れない。

「M870か……悪くない……が」

平然な顔をして、一番面白い事が好きな聡史は、色々な武器を見て回る。

時々銃を構えていたり、装填のし易さを考えながら、ある武器にたどり着く。

『G36C』 H&K社の製造したアサルトライフル。

屋外での信頼性が高く、砂に埋もれようが、水につけようが射撃に支障はない。

しかしそれは実銃の話であり、実際にやったらバッテリーが壊れます。絶対に止めましょう。

同じくサイドアームとして有名なベレッタM92FとCZ75を選んだ。

《オオ！！ これはWinchester M1887！！ 私はこれに決めました》

ブリキロボットのアルソメが手にしたのは、ソードオフモデルの『Winchester M1887』。

銃身が短く切り落とされており、近距離での戦闘に特化した形になっている。

そのワツカの手でどう持つか不思議だが、本人（人なのか？）の選んだ銃なので誰も何も言わない。

—— 特技のターミネーターコッキングは本当なのか！？

「部長さん、私はどうすれば良いですか…？」

「小春は参加……しないよな！ それじゃ、怪我した時の為に保健係を任せる…！」

「あ……はい！ 一生懸命頑張ります」

参加と聞いた時、小春の顔が一瞬で泣きそうになり、茂は後悔した。か弱い少女がこんな危ないゲームに参加する筈が無い。

それを聞いて、小春はほっとすると同時に力が抜けた。それでも小春自身はもし参加したら…と考えていたらしい。

その後各自選んだ武器を手にして部長の前に立つ。

見回してそれを確認した部長が頷くと、同時に書類を手を持つ。

「では諸君。各自武器を持ったな？ ルールを説明するぞ」

既に保護ゴーグルに迷彩服を着込んだ茂が書類を各自に渡す。その書類のタイトルにはこう書かれていた。

『サバゲー on the 学校！』

「……サバゲーと学校が日本語なのは一体？」

「単に英語のスペルが分からなかっただけじゃないのか？ 恥ずか

しい……」

聡史の疑問に妹が答える。その事実兄の心臓が打ち抜かれた。茂はそのまま校門の隅へと移動し、三角座りでブツブツと言ひ出し始めた。

「どうせ俺なんか……佐久川みたいに就職が決まっていな……学力が足りないって言われて見学さえもさせて貰えなかったぜ……」

「だ、大丈夫です！先輩は皆に優しいです！今日みたいにいきなり変な事言う先輩ですが……ですが……」

一生懸命慰めようとする小春だが、言葉が続かない。フォローの言葉を間違えて、終いには自分も泣きそうになる。そこで小春の先輩でもある行人のフォローが入る。

「部長には皆を引っ張って行くリーダーシップがあるじゃないですか……！きつと就職してもその才能で会社のリーダーになれますよ……！」

「……こんな俺でもなれるか……？」

「大丈夫です。ボクの知っている先輩はそんな事で落ち込みません」

行人の自信満々の笑顔に、思わず茂は笑みを零す。

「そうだな……こんなんじゃ、部長失格だ。すまん」

「頑張ってください！」

「そうですよ！『部長らしく後の事を全部、部下任せで自己中心的に』進めば良いんです……！」

「うがあああ……！！！」

頭を抑えながら転げる茂。まさか助けの手を伸べた後に地獄へと突

き落とすとは……。

急な反応に行人と小春はびっくりし、どうすれば良いか分からず戸惑っていた。

「天然だね……」

「天然だな」

「……天然？」

『……貴方が言わないで下さい』

それを微笑ましく眺める3人とロボ+αな部員。

第1話・部長の眩きから始まる物語（後書き）

一気に投稿できる方法無いの？

サバゲー説明……の後の戦闘（佐久川 アルメソ 部員C）（前書き）

アルメソがアルソメになってた……やっちゃった♪

サバゲー説明……後の戦闘（佐久川 アルメソ 部員C）

「……こほん、すまなかつた皆。今からルールを説明するぞ」

あれから部長の茂は数分転がり、既に着用していた迷彩服も戦場を経験したかのようにドロで汚れていた。

再び始まった部長の説明と共に、各自渡された資料を目にする。

『サバゲー on the 学校!』（注意 学園です）
〜ルール〜

目標は『相手陣地のフラグを取る』又は『敵戦力の殲滅』

今回は赤30vs青30の二つに分かれてプレイします。

赤チームは北半分の校舎、青チームは南半分の校舎、と初め分かれています。

部長中心に世界は回っているので、実際のサバゲーの知識は通用しません。

「はっ、なにそれ？」と鼻で笑われます。恥ずかしい思いをしたくなければ気をつけましょう。

・装備した銃を使って相手チームの撲滅をします。（殴っちゃ駄目よ？ マーシャルアーツはOK）

・自持ちの弾薬が消耗したら、自軍へ戻って補給が出来ます。（倒した相手の武器を手にして戦っても良い）

・時間は2時間制なので、思う存分ドンパチして下さい。

・ヒットはダメージ制です。頭部は一撃なので「ヒット」もしくは「ぐはあ!」「げふっ!」「ぎゃあ?!」「…」などを叫んで撤退する事。（初心者は例外）

・距離に応じて数発まで耐える事が可能。遠距離の射撃は2発。近距離ではどこにあたってても1発です。

・特殊な弾なので拡散すると音が出ます。「気付かなかった」は駄

目です。ズルしちゃいけません。

・銃の弾（塩）では学校の備品を破壊出来ません。もし器物損傷が起きましたら自己責任です。

・重要ですが、放送部は知りません。罪を部になすり付けるようでしたら、最悪不法侵入罪で捕まって貰います。

・あとは適当にルール付け足していくのでここらで終了。

…補足…

・放送部なので取材班が居ます。相手チームと間違えて撃つのは止めましょう。

・取材班も武装をしていますので、交戦しても知りません。

・可愛いナースが居るからと言って、自殺をするのは止めましょう。我らの可愛いアイドルが困って…困った顔も可愛いのでやっぱりOK。それでもほどほどに。

「——準備は良いか!」

《《おおー!!!》》

「誰だよ!? こいつら!」

全てを読み上げて、部長の掛け声に反応したのは、部員の後ろに立っていたむさくらしい男達。

いつの間に居たのか分からず、思わず聡史がツツコミを入れる。

それぞれ様々な軍服を着こなし、中には顔面塗料で黒人(?)へと中途半端に(首がちゃんと塗れてない)変身している者も居る。

その手には様々な小銃。…どうやら彼らも参加するらしい。

「HEY 《クチャクチャ》嬢ちゃん《クチャ》。俺達を《クチャクチャ》舐めてたら怪我するぜ…クツ《チャ》クツ《チャ》」

(日訳 こんにちは、お嬢ちゃん。俺達を舐めてたら怪我するぜ…クツクツ)

「…ガム噛むないで言ってくれますか？」

クチャクチャとガムを噛む音にイライラしながらも、真尋は「この人達誰？」と思っていた。

その数50名ほど。流石に全員を相手にする訳では無いので、自軍と赤に分かれて入ってくれるようだ。

「ふえ……怖いです…」

平均身長が10歳ほど違う小春からしてみれば、全員巨人だった。

『土地上げ下げの』とか『お星様の』とかではなく、自分を見下ろす眼つきが全員怖かったのだ。

思えば男性恐怖症もそれから始まっていた。隅の方でガタガタブルブルと震える小春を見て、和んでいるだけだが。

《ふむ……所詮なりきり軍人ですか。私の敵では無いですね》

「おいおい…俺達を舐めて貰っちゃ困るぜ？ これでも映画の俳優として参加していたんだぜ」

アルメソの呟きに反応して、男は銃を構える姿をとる。

それでも男の出ていた映画が、主人公がマシンガンを連射して100人以上の敵を撃つ映画。

——の撃たれて吹き飛ぶ役だった。一応自慢らしい。

「おい、アルメソ借りるぞ？」

《ご主人様？ どうしましたか？》

「お前スピーカーだろ？ よし……」

《あゝ、こっちでチーム分けを始める。放送部員は全員赤チームなので、外部の者はこっちに集まれ》

アルメソの口から出た口当てを使い、胸のつまみを使って音量を調節する。

胸にあるガラス張りの中のゲージの針が少しずつ動く。
その放送を聞いて、目の色を変えてむさくるしい男性達がアルメソと茂の周りへと集まる。

雄たけびを上げて、己の肉体を駆使して——、一列に並ぶ。

「——って、ちゃんと並んでるかい!？」

珍しく聡史がツツコミの連発をする。

その声に最後列に並んでいた黒人(?)が振り返る。

「Hey boy! 順番を守るのは当たり前だろう?」

聡史にそう告げた後にペツとガムが吐き出されたが、ガムは吐き出した黒人(?)の頬へとくっついて付いていた。

一瞬の動作で何が起きたか分からない黒人(?)は動揺する。

「ガムを校門前に捨てないでくれるかな?」

「なっ… what!？」

「そんな事されたら……僕が怒られちゃいますから」

そこに立っていたのは、真夏だと言うのに手編みマフラーを着用している変な人。

生徒会長——さいとう 齊藤 しょう 翔。学園3年生。茂と同じクラス、そして古い親友である。

合気道を用い、ガムが地面に着く前に黒人(?)を地面へ伏せさせたのだ。その速さは目に見えない。

しかし、投げられた黒人(?)は黙っておけない。微妙に日本語を使ったが……

「freeze！」

離れるように転がって起き上がり、サイドアームのベレッタ92Fを取り出すと、マガジンを一瞬で装填させた。

その動作に周りにはざわめきを覚える。そこまで早く装填出来るのは難しい。

生徒会長もその動きに、僅かながら眉を動かす。

「……それでどうする気かな？」

「…手を上げる」

言われた通り、生徒会長はニコニコと笑顔で肩を窄めながらゆっくり手を上げた。

真夏だと言うのに、黒人は緊張で汗が流れるが斉藤 翔は涼しい顔をしている。

ちなみに黒人（？）は、特技が『即時リロード』であり、その後はどうしようか考えていなかった。

唯一出来る事が睨みを効かせて、相手を何もさせないようにする事だった。正直ビクッてます。

長い沈黙の後、黒人（？）はやっと口にした。

「……ガムを捨てたのはすまなかった。だが、俺の後ろに立たないでくれ」

「ん？ それはすまなかったね。僕も謝るよ」

手を上げたままお辞儀をする翔を見て、黒人（？）はホッとしたのか銃口を下げる。

その後マガジンをリリースし、サイドポーチへと収納させる。

流れ出る汗を出て、前に並んでいる人に「奴を相手にしたら殺され

る」と伝えていた。

「……えっと、イベント中にごめんね『しげちゃん』?」

「しげ……茂で良いって言ってるのによ……気にするな。あとこれから学園の高等部を使うから学園長に許可取ってきてくれ」

先ほどの騒がしさが無くなり、ムズ痒い静けさに頬を掻く翔は、恐らく前に居る茂へと謝る。

『しげちゃん』と毎回毎回言われながらも、茂は気にしない。

ただ言いたい事は——学園の許可も無しにサバゲーをしようとしていたのか!?（今も普通に怒られるけど）

「うーん……仕方ないな。今度は一度相談してよね?」

「おう、悪いな!」

かなり無茶な事を言っているのだが、翔は頬を掻くだけで何も苦が無いように承った。

そう言って、校門の前に溜まっている落ち葉を拾い集めてから学園の方へと入って行った。

『赤陣営の本拠地』西校舎、3年会議室。

『青陣営の本拠地』東校舎、1年会議室。

「作戦会議だ!」

《《yes sir!!》》

「誰かこいつら止めてくれ……」

ザッザッと軽やかな足取りで『休め』と『敬礼』を交互に繰り返す姿を見て、頭を抑える者多数。

赤陣地には野戦陣営（会議室だが）を引き、周りにはまだ始まって居ないのに警戒する者も居た。

「……こいつら馬鹿だ」

流石に疲れたのか、椅子に腰掛けながらも真尋がため息をつく。

それはそうだろう。ツツコミの居ないボケなんて単なる疲れるだけだ。正直辛い。

黒板に張り出された学園の地図を参考に、部長が力説する。

一つひとつの動作が有るたびに兵士は歓声を上げる。

——そして、司令官である長瀬 茂はGOのサインに出す。

それを合図に兵士はヘルメットとゴーグルをつけて飛び出していった。

その数8名ほど。恐らく偵察兵なのだろう。

後ろから見ていても、動きがベテランなのが部員の誰もが見て取れた。

流れに着いて行けない部員達は呆然とする。

「……さて、次はお前達だな？ 今αチームに偵察に向かって行って貰った。

30対30、素人が約半数を占めているこちらのチームが相手を殲滅するのは難しい」

「——と、言うത്？」

誰かが呟いた言葉に、部長は「それを待っていました」と言わんばかりに頬を緩ませる。
精一杯ためてからの発言。雰囲気につけたサングラスを人差し指で元の位置に調節する。

「フラグの奪取だ」

「やっぱりか……」

「展開が燃えるだろ？　と言う訳で作戦会議だ。俺達は素人なので基本は防衛に当たる」

「……前に出てドンパチしたかったな……」

防衛と聞き、ため息を着く部員も居た。

銃を持ってみたら、誰でも一度は連射してみたい。そう思うだろう。防衛なんていつ出番があるか分からない。詰まらない役割だ。

「……サバゲーは協力性が大事だ。一発でも当たったら即終了だ」
「あ、良い忘れたがそんなルール無いからな？　そんなの詰まらないだろ？」

1人の部員が格好良く決めた台詞も、部長の前では「なにそれ？」状態だった。

すると突然、部長が耳元に装着しているインカムに手を当てた。そのまま黙る部長に心配になった行人が尋ねる。

「……どうしたんですか？」

「どうやら交戦したらしい。相手の数が約10で、素人が居る俺達を一気に殲滅しようって作戦らしいな」

その中、部員の陣営に1人の男性が入ってきた。既にヘルメットとゴーグルを装着した姿は、何も言わなくても分かる。

その立ち姿の気迫におされ気味の部員達。

「司令官殿、私に行かせて下さい」

「……………分かった。部員の使えそうな奴を連れて行け」
「yes sir!! その男子3名、ついて来い」

長い沈黙の後、許可が下りた事に敬礼をして、迷彩服を着た男性は『アルメソ』『佐久川 聡史』『部員C』を手招きする。

部員達は部長へと顔を合わせるが、面白そうに手を振って見送っていた。

《私のターミネーターコッキングの見せ所ですね…》

「はあゝいきなりかよ……………少しは足掻いてみるか」

「おお!? 俺が……………呼ばれるなんて…」

部員Cは歓喜していた。実はこのまま出番が無いと思っていたからだ。

そこは流れるに部員AかBが呼ばれるだろうと思っていたが、Bを通り越してCを呼ばれるとは思っていなかった。

その事に感激していると、DとBの部員が祝いの言葉をくれる。

「頑張れよ、俺達のビック・ボス」

「やったな……………俺の分まで頑張れよ」

「D、B……………ありがとうございます」

涙を堪えて丁寧にお辞儀をして、部員達の見送りが有りながら3人と隊長は自軍から出て行く。

自軍から出て3分。

現在位置はポイントAの廊下。 (1F 西倉庫手前 赤本拠地より南へ40m)

「隊長……でいいのか？」

「小隊長で構わん。ヒヨッコ達に背中を任せる気も起きんのだな」

身を潜めながら、交戦場所へと移動する。

応援要請があつた場所はポイントBの1F 南体育館。（現在地から南へ80m）

そこは学園生徒500人が広々と使える場所であり、多くのサバゲ―経験者が交戦地点と予測していただろう。

椅子や机を壁にしながらも、応援を待つて健闘している者がまだ居るのだろうか。

（！注意！ 体育館に机と椅子はありません。散らかしたらちゃんと後片付けをしましょう）

「止まれ… 偵察部隊だ」

突然手を上げて、動きを止めた小隊長に聡史は身を乗り出して、奥を見る。

青いラベルを貼って軍服を着込んだ兵士が周囲を警戒していた。

隊長は突然身を乗り出す聡史の頭を抑えて、影から敵の数を調べた。

「数は…… 4人か」

《いえ、5人です。奥の人が丁度重なっていました》

アルメソの指摘を受け、小隊長は黙る。

無言の沈黙が支配する中、部員Cが小隊長へ尋ねた。

「小隊長殿…… どうしますか？」

「……こちらは4人。素人が3人と居て戦力は不利だが戻る訳にはいかん…… 奇襲をする」

小隊長は、自分の武器であるM16A2に初弾を装填させ、各自に武器をいつでも撃てるように伝える。

弾倉はちゃんと装填したか？

セーフティーは外してあるか？

バッテリーは大丈夫か？

《私のバッテリーはちゃんと充電してきました》

……心の持ち構えは大丈夫か？

それを確認すると、小隊長は指示を出す。

本格的な事に、緊張する聡史と部員Cだが、アルメソは静かに指示を聴いていた。

「ここは一直線の廊下だ。このまま交戦すると奇襲をかけたとしても直ぐに形勢逆転されてしまう」

その言葉に誰もが頷いた。

「よって、挟み撃ちだ。あの空き部屋とそこにある部屋は先ほど地図を見た限り、通じている。」

ここで銃撃をして相手の目を集中させた所で、裏へと回る。そこをバースト射撃で……」

顔を上げて、意味が通じたか確認する。

3人(?)は頷く。……ん？

疑問を持った部員Cが手を上げて質問をする。

「最初に言ってたここで戦闘は拙いってどういう事ですか？」

「……長時間の戦闘は拙いって事だ。策が無ければこのままギリ貧で消耗してしまう」

睨む目つきで「分かったか？」と言う小隊長に、小さくなりながらも「すみません」と謝った。

「……奇襲役は俺がやる。お前達はどこで目を引いてくれ」「了解」

聡史がG36Cを構える。

部員Cが寝そべるようにしてM4カービンのスコープを覗き込む。
アルソメの手からは5本の触手（？）^{フッカ}がいつの間にか出ており、器用にM1887を掴む。

小隊長のGOのサインで皆は引き金を引き、射撃を始める。

——パシュツ　パシュツ

「ッ……敵襲！！　応戦しろ！」

素人なので弾はあらゆる方向へと飛んで行く。

気付かれたと同時に敵も物陰に身を潜み、応戦してくる。

「うわ！？」

「大丈夫か！？　部員C」

「はい、大丈夫です……って、貴方も部員Cって呼ぶんですか」

パシュパスツと塩が拡散する音と排莢された薬莢が地面にぶつかる音が響く。

この銃どうなってるんだ？　なんて考える余裕も無く、聡史は懸命に狙いを付けて引き金を引く。

すると突然、引き金を引いても弾が出なくなった。

「——弾切れだ。援護頼む」

「ええ、僕ですよ!？」

《私も5発装填なので、忙しいです》

どうやら、全員リロードのようだ。

M4とG36Cは同じ30発の装弾数であり、3点バースト撃ちをしていても、同じ頃に弾は切れる。

相手のチームには協力性があるのか、交互にずらしながら絶え間ない射撃を繰り返してくる。

距離を縮めてくる敵を見て、瞬時にレッグホルスターからベレッタ92Fを取り出す。

ベレッタが相手に見えたのか、再び弾幕を張りながら後退していった。

両手で支えて次はベレッタの引き金を引いていく。それでも15発の装弾しかない。

「こっちも持たないぞ？」

「わ、待ってください! 弾倉が引つかかって……うわあ!？」

パスッ。

気付けば、戸惑う部員Cのヘルメットに塩の塊が付いていた。

一瞬の事で分からなかったが、自分は頭を撃たれた事に数秒して気付いた。

「あ……」

「くそっ! 部員Cがやられた、アルメソM4を使え」

《私は生涯M1887を使うと誓い……あれ? 弾切れましたね、アハハ》

「クソロボットオオオオ!!」

同じく弾の切れたベレッタを捨て、逆のホルスターに仕舞ってある

C275を取り出す。

これも弾が切れたら、降参するしかない。……開始10分で終了なのか？

半場諦めた時、相手からの射撃の勢いが急に収まってきた。

試しに顔を少し出して覗いてみるも、倒れたままの敵兵。

そこに親指を立てて「殲滅した」と言うような眩しい笑顔の小隊長が居た。

「助かった……」

《私は弾切れですね》

一気に力が抜けたが、テレビゲームでは味わえない緊張感を感じ取れて楽しかったと思っている。

未だアルメソがM1887ってうるさいけど……

「よくやった！　と言いたい所だが、半数が俺の猛攻の中を掻い潜り、撤退した」

「……殲滅したんじゃないのか？」

合流した聡史が気が抜けた声で小隊長へと尋ねる。
その言葉に詰まりながらも、小隊長は前へと歩く。

「……何故かM16A2がジャムった」

「ジャム？」

「ジャム」

弾詰まりのことであり、俗に作動不良全般のことを指す。『ジャムる』

ちなみに原因が銃にある場合を指して言うので自分には全く関係ない。えへへ…遊戯ガンではどうなのでしょう？

「いや、自分の責任でしょ」

「……M16A2も引退か……M4A1にしようか……」

その説明を聞いて、「結局、自分の所為じゃね？」と口にした聡史だが、小隊長は全く話を聞いていない。

部員Cの形見であるM4カービンを手に取り、マガジンを交換して前に進む。

そこでアルメソが翔隊長へと声をかけて、進軍を止める。

《小隊長さん。私のM1887が弾切れを起こしまして……一時撤退しても宜しいですか？》

「我々は援軍に向かわなければならぬ……1人で大丈夫か？」

《問題ありません》

そう言うアルメソは立ち上がり、サイドアームのGE M134を腰に溜めて歩いて帰った。

「武器有るじゃねえか！？」と言うツツコミも疲れた聡史は見ない振り。やはり無茶が有ったようだ。

聡史は今後、楽に出来るボケへと移転するようです。

「……幸運を祈る。さあ、俺達は進軍するぞ」

「マガジンも一つずつ消耗したが……まだ戦闘はいけるだろう」

全ての銃の空になったマガジンを交換し、聡史は小隊長の後を着いていた。（目的地まで南へ50m）

サバゲー説明……の後の戦闘（佐久川 アルメソ 部員C）（後書き）

【次回】

腹ペコ超人・石田玉緒と、ボクっ娘少年・手塚行人に与えられた任務。

『中庭にて進軍中の敵を狙撃せよ』

戸惑いながらも行人は、なんとか狙撃位置へとたどり着く。

——だが、なにを思ったのかタマちゃんが狙撃銃のスコープを壊してしまった！！

「邪魔」の二文字で片付けられたスコープ……果たして行人は無事任務を遂行する事が出来るのか！？

……つて、殆どネタバレじゃん。

第3話・腹ペコ超人の無双録（行人 玉緒）（前書き）

最近方向性がおかしい。

（10人程度のサバゲーを書こうとしたんだけどね……）

—— まあ、書いて途中で止まったら、

『俺、走るよ！ 考えないで走る！！』

第3話・腹ペコ超人の無双録（行人 玉緒）

「あの……痛くないですか？」

「う、ウッス！ へっちゃらっス！」

負傷した（自爆）兵士を治療する場所、放送部にて既に治療が始まっていた。

元々部室は会議室を使っていた部屋らしく、かなり広い。

部室の大きさ勝負で言うのなら、野球部、サッカー部、生徒会と次に広いであろう。それも全て、部長である——長瀬 茂の活躍によって与えられた部室なのだ。

それはそうと、開始早々『M67型試作手榴弾』で自爆する者が少なからず存在した。

しかも負傷が間違って装填した6mmBB弾だったので、身体中に通常では出ない痣が出来ている。病院行け。

『M67型試作手榴弾』

ピンを抜いた5秒後にBB弾が炸裂する古い友人が試作で作ったものの。

小型なのでバッテリーは組み込めず、ネジを巻いて作動させるタイプ。装填した50発のBB弾を炸裂させるが、バネの計算に誤差が生じた為、使わないようになったが——

「……ぶっちゃけ、塩なんだし大丈夫じゃね？」で、戦場に再び投下された。

特殊塩弾は当たっても痛くは無いが、間違ってBB弾を装填するとかなり危険。

実験にて病院へ搬送された者——約10名の尊い犠牲によって、危険さは証明された。

——誤差のバネによって飛び出されたBB弾の速度は260m/s。
死にはしないが、至近距離で破裂させたら皮膚が貫通する程度。骨には突き刺さるだけで問題ない。

結論。——こいつ馬鹿だ。

天使の治療を受け、夢心地の兵士。コイツそのまま死ぬんじゃないだろうか？

……それでも女性の免疫が全く無い兵士は照れているようだ。

作戦会議本部にて、茂は眉間に皺を寄せる。

偵察からの報告、前線からの報告共に悪い話しか出てこなかったからだ。

集められた士官（？）達も、どうすれば良いのか分からず、司令官である茂の命令を待っていた。

戦況も赤：青だとすると4：6と、若干だがおされ気味である。

今後、打開策が無い限りこのまま3：7、2：8…へと敗北に繋がるだろう。

「司令官殿……どうされますか。我が軍も南体育館から戦線が広がります」

「あゝ……おされ気味だな。よし、隠し兵器をだすか」

痺れを切らせた士官は尋ねると、顎に手を置いて考えていた茂はやつと決断を下す。

——隠し兵器——

その言葉に士官がオオ！！とざわめくを立てる。

現在南のポイントBは交戦中、そうなれば東のC、Eを取らなければ

ば勝ち目がない。

決断した茂の行動は早かった。陣営から出て、ある人物を探す。その人物は本部周辺をキョロキョロと可愛らしく警戒していた人物だった。

「行人、タマちゃん……出番だ」

「——ええ！？　ボクの出番ですか！？」

外を警戒している手塚　行人は、部長の言葉を聞いて、そして理解した後に叫ぶ。

ぼくとしながら時々大きな欠伸をする玉緒は、呼ばれた事に不思議に思いながらも行人の後をついていく。

陣営へと戻って来た茂は、2人を取りあえず座らせる。

「現在、佐久川がポイントBの体育館へ向かっているのは知ってるな？」

お前達2人には、その逆……ポイントCの中間地点2へと移動して貰い、進軍中の敵小隊の狙撃を頼みたい」

「……狙撃ですか」

行人は、先ほど出て行った部員が戦闘に遭ったと聞いた。

誰か知らない部員Cはやられて、アルメソが弾薬補給で退却してきた事も知っている。

「敵の数は？」

「情報では相手は3名だ。目視出来る敵を殲滅したら戻って来い。外の部員も救援に向かうらしい」

「……もぐもぐ」

部長の話聞き、行人は分からない事を尋ねた。

敵は3名。少数と言う事は警戒が多い……。

玉緒は机に置いてあつた饅頭へと手を伸ばし、かぶりつく。中のこしあんがぎっしり詰まつた饅頭は、玉緒の空腹のお腹を満たしてくれるだろう。……3分くらい。

「……ボク達だけで出来ますか？」

「ああ、俺はお前らを信じてる」

不安になる行人に茂は満面の笑顔で答えた。

裏では「タマちゃん」と行人がタッグを組めば無双が起きるからな……と考えていたなんて、死んでも言えない。

その笑顔に負けたのか、行人がため息つく。だが、その目には決心したように真っ直ぐだった。

「わかりました。それでは中間地点2へと向かいます」

「ああ、頼む。ポイントCまでは護衛を2名つける。何分人手不足だからな……すまん」

「行人……頑張ろう」

少し照れくさそうに敬礼する行人に、茂は力強い敬礼を返す。士官（？）達も同じく敬礼をする。

そして、放送部員から再び戦場へ出る者が現れた。

出発までに銃の調子を調べ、弾薬も持ち、与えられた命令を胸に戦場へと護衛の2人を率いて向かう。

ポイントC（本拠地から東へ約50m）

隣のポイントE（Cから東へ約70m）は敵の領地となっている為、いつ戦闘が起きてもおかしくはない。

銃を握る手から汗が止まらない。やはり緊張するものだ。

「……こちら護衛班、ポイントCに到着。これより帰還する」
「あ、ありがとうございます」

頑張れよ、と手を上げる護衛の人に慌てながらお辞儀を返す。
玉緒も行人を見習って、見よう見まねで頭を下げる。

ここからは2人だけの行動。援護も期待できず、自分達だけで頑張るしかない。

「……大丈夫」
「……タマちゃん、何か合ったらサポートを頼みます」

その言葉にコクツと頷き、玉緒は『M16A2 ゴルゴカスタム』
を手に取る。

それを確認した行人は、初めの一步を踏み出そうとするが——玉
緒に止められる。

「！……んっ……」
「し……敵、1名確認」

驚いて声が出そうになった行人の口を左手で塞ぎ、肩を使ってスコ
ープも覗かずに照準を定める。

そんな無理な体勢で当たる訳が無い。行人は手を使ってタマちゃん
を制止させ、手をどけて貰う。

突然止められた玉緒は不思議に思いながら行人を放す。
玉緒が微かに聞いた話では『目に入った敵は即時に殺せ』と覚えて
いたらしい。

「……？」
「……相手は3名と聞きました。恐らく周辺警戒です。敵が合流した

所を狙いましょう」

その言葉に一瞬考えたタマちゃんだが、静かに銃を下ろし頷いた。しばらく観察を続けていると読み通り周辺警戒だったらしく、通信機のようなものを使った後、その場を離れて行った。

その後を気付かれないように着いて行く2人。

頭に入れた地図で中間地点2は、現在地から約8m南に行った場所。

「行きますよタマちゃ——って、何して……っ!？」

——ガッ バギッ

振り返ると、タマちゃんが銃のスコープを碎いて取り外していた。思わず叫ぶも口を押さえる。声を聞かれていないか覗くも、相手は気付いていないようだ。

ホッのため息をつき、改めて行人はタマちゃんに何をしているか尋ねた。

「なにしてるんですか！ それ借りてるものですよ！ ボクが怒られちゃいます!！」

「……ごめん、邪魔だったから……」

スナイパーライフルでスコープが邪魔なんて聞いた事が無い。どうやって狙いを付ける気だろう？

頭を抑える行人にタマちゃんは首を傾げていた。

弁償はどれくらいだろう……？ 確かスコープだけでも高かったよ
うな……。

未だコテツと首を傾げるタマちゃんだが、敵の姿が見えなくなる前にブツブツと暗い行人を目覚まして後を追う。

「……やはり3名ですね」

後を追うと、中庭の真ん中——地図で言うと中間地点1、2の丁度真ん中で3人の兵士が会話をしている。

行人はタマちゃんが壊したスコープで敵を観察する。

壊れてすでに取り付けが出来ないが、遠くを見るようでは使う事が出来た。

続けて何をしているのか観察する——突然、スコープを挟んで相手の1人と目があつた。

「——スナイパー!!」

「!?!」

相手は叫ぶ。その声に反応して外の2人も物陰へ身を潜める。

気付かれた!? どうして!?

行人はスコープが光の反射で気付いたとは知らなかったようだ。

敵は転がるように物陰に隠れながら、2人が隠れている草むらへと銃弾（塩）の雨を浴びさせる。

近くの草に跳ね返り、拡散した塩が降り注ぐ。

遊戯ガンでも意外と恐ろしく、銃を握り締めたまま行人は反撃の行動が出来なかった。

「……下がって」

「え? タマちゃん!?!」

すると、タマちゃんがその場から飛び出た。

そんな事をする銃弾の格好の的になってしまう。幾ら学園最強と言っても、素手では銃に勝てない。

突然出てきた玉緒に畏か? と思いつつも敵兵は照準を合わせる。

「撃て、撃てええ!!」

「……」

低い姿勢から接近し、急に大きく左へと跳ぶ。玉緒が先ほどまで居た場所に白い塩が撒き散らかる。

常人では出来る事の無い、アクロバティックな動きに見とれていた敵兵は一瞬ハツとなり、急いで銃口を玉緒へと合わせる。

その間にも、空中で姿勢を変えてM16A2ゴルゴカスタム（スコップ無し）を構え、適当に引き金を引く。

どうやら安全装置は『セミ』になっていたらしく、弾は一発しか出てこない。

「この東方のシモ・ハイへと謳われた俺が——グハッ!? ば、馬鹿な……」

「マックス!? くそつアルゴ、奴は手練だ!」

——それでも玉緒の射撃はマックス(?)のヘルメットを直撃した。運よく相手の1人の頭を捕らえたのだ。

それを知らない相手チームの叫び声が中間地点?——中庭に響く。玉緒は立ち上がると今度は狙いを着けて、引き金を引く。

「……? 弾切れ?」

そんな筈はない。先ほど撃つたのはたったの1発。

不思議になりながらもM16A2の排莖口を見れば、空薬莖が詰まっていた。どうやら、あの動きに銃が着いてこれなかったらしい。

叩いたり振ったりして症状を確認するが、銃を初めて持った玉緒は首を傾げるだけ。

その誤動作の直し方は知らなかったのだ。

「馬鹿め!!! 戦場で隙を持った者が死ぬ!!!」

それを好機と見たアルゴ（？）いや、スティーブン（？）が接近してくる。

その手にはUZI。連射力が高く、近距離での殲滅力が高い。玉緒は撃てなくなった銃を構える事もせず、立ち尽くす。

「——タマちゃん!？」

「女!？ だが遅い、死ね色男!!」

行人はセーフティの掛かったままの銃をどうしようかアタフタしている間に叫ぶ。

スティーブン（？）は行人へと気付いたが、腰溜めしたUZIの引き金を引く。

無数に吐き出された弾丸（塩）は、玉緒へと襲い掛かる——が、

「……この程度、避ける必要ない」

「なにっ!？」

M16A2を持ち替えて、顔を狙った銃弾をM16A2で防ぐ。パスパスとM16の側面に塩の塊がついた。

まさか防ぐとは思わず、スティーブン（？）は動揺する。しかしまだこちらが有利だ。

更にサイドアームのグロッグ18Cを取り出し、フルオートで玉緒へと襲い掛かる——が、それよりも早く玉緒が動く。

「——ぐはっ!？ 馬鹿な……CQC……」

またしてもその銃撃は届かない。

引き金を引くよりも早く、自分が地面へと組み伏せられていた。そして、自分の持っていた18Cが自分の身体へと撃たれる。

一瞬の動作に一息つく玉緒だが、殺気を感じ、奪った18Cをある方向へと投げた。

「ビックボス!? ええい、奴は化け物か!!」

投げた18Cはアルゴ(?)が放った弾(塩)を全て打ち落とした。反動が無く、精密な射撃が可能事だった事が唯一の弱点だろう。それと同時に再び間合いを詰めるため、玉緒が走る。

本能的に勝てないと悟ったアルゴ(?)は、自分が倒れる前に通信機を使つて伝える。

——放送部員の中には素人ではなく、英雄が居たと——

「くっ…本部!? こちら偵察チームβ!! 全滅だ、敵には英雄が、ビック・ボ——」

《…どうしたβチーム!? 応答しろ!?》

アルゴ(?)は、全て伝える前に硬直する。目を見開きながら銃を落とし、空いた右手でヘルメットを触つてみる。

二つの白い塊が砂のように落ちてきた。——走りながら銃を瞬時に抜いて、構えもせずにヘッドショットを狙ったのか?

それを知った時には通信機を地面へと落とし、自分も倒れこんだ。

「……殲滅完了」

銃をホルスターから抜く億度が早すぎたらしく、デザートイーグルは玉緒の5m前まで転がっていた。

中庭ではお腹を好かした1人の男性と、その雄姿を呆然と見る少女の姿があった。

どうでもいいが、行人は男です。

「……帰る」

「あ、待つてください」

そう呟いたタマちゃんの手には数丁の小銃。倒した証拠として持つて帰るらしい。

やっと我に返り、安全装置の意味を理解した行人は、あわてながら再び安全装置をかけてタマちゃんの後を追った。

中庭から出て行く所を後ろから叫び声で呼び止められる。

「居たぞ!! こちらγ部隊。βは全滅、コードネーム【英雄】と接触——って、発砲された!？」

「きやつ……あ、あれ? ちゃんと安全装置かけた筈なのに……」

「……行人、逃げる」

いきなりの怒声にびっくりした行人は、VZ61の引き金に手を掛けてしまった。

しかも安全装置がきつちりはまっていなかったらしく、暴発した銃弾は敵チームへと襲う。

その隙に玉緒は行人を担いでその場から離れる。

「た、タマちゃん!? 自分で走れ…目が回るう」

「……? これでいいや」

体重30kg弱の行人を左腕で担ぎながらも、手に入れた武器の中から適当なものを取り出す。

『モシン・ナガン M1891』

木の色に塗装された細長いボルトアクション式ライフル。長さとお細さで木の棒と勘違いしたらしい。

装弾数5発の箱型弾倉を用いたタイプで火力も安定している。

だが、玉緒は片手なので次の弾を撃てないと分かったら、銃を捨てて行くスタンス。

しかも丁度選んだのも長くて邪魔だったから。（全長120cm）

「モシン・ナガン！？……シモ・ヘイヘか！！」

そんな相手チームの戯言に耳を傾けず、玉緒は後ろを見ずにモシン・ナガンを肩に載せ、適当に引き金を引く。

牽制用に撃っただけで、そんな撃ち方で弾が当たる訳が——当たった。

丁度2人を狙撃しようとしていた兵士のドラグノフSVUを弾いたのだ。

啞然する兵士。

精密な射撃——恐ろしいものを見た兵士は、隠れる事も忘れて弾かれたドラグノフSVUを見ていた。

「……銃を狙ったのか！？」

「いや、衝撃無いから」

訂正。自分でどこかへ投げていたらしい。使用している弾は衝撃が生まれない安全弾なのでそんな事は起きない。

隣で物陰に身を潜ませる仲間が否定する。それを言い訳する狙撃兵。

「いや、ほら……丁度銃に弾が当たったら誰でもそんな台詞言いたいだろう？」

「……まあ、雰囲気的に『銃だけを狙ったのか！？』とか言いたくなるけど——は？」

先ほどまでのシリアス顔はどこかに、ハハハ！と愉快に笑う狙撃

兵の額に白い塊が付く。

それは物陰に隠れていた兵士も同じだった。拡散した塩が口に入っ
たのか、しょっぱい。

黒銀のデザートイーグルから放たれた銃弾が二人の額に直撃したの
だ。

【！注意！】

今回の弾（塩）は口に入れても大丈夫です。ぜひ家庭料理にも活用
してください。

冷たい水に張ったキュウリを取り出し、お皿に置いてマシンガン
を連射する。弾倉一つ分撃ち尽くした後、口に運んでみてください…

…あら美味しい！？

（一般の食塩と同じ量でも塩分濃度が低い。それでも感じる塩加減
は変わらない！？　ぜひ、ご家族の健康を心配するのなら！）

「一時撤退だ！　少数部隊では勝ち目が無い！　本隊と合流するぞ」
《《了解！》》

巧みな狙撃に勝てないと知ったのか、相手が下がって行くのを玉緒
は木の陰から眺める。

警戒をしているがそのまま撤退していく見て、構えていたデザート
イーグルを下ろす。

連射も出来て持ちやすいデザートイーグルを玉緒は気に入ったよう
だ。

（銃を知らない初心者が初弾ジャムとボルト式を経験すれば、連射
の出来て小回りの効く銃を選ぶのは当然かも知れない）

「……こつちも撤退」

「はうゝ担がれたままで何が起きたのか分かりません…」

未だ腰に抱えた行人を思い出したのか、ゆっくりと地面へと下ろさ

せる。

それでもフラフラとしているが、V z 6 1の引き金は引いたままだった。

「……行人？ 大丈夫？」

「だ、大丈夫です……」

行人は右手で掴んでいる硬い物を疑問に思う。

担がれたままV z 6 1を連射していた所為で、既に電動音しか聞こえない。

「きゃ！？」

本日何度目かの可愛い悲鳴。普段はちよつと驚いた程度なら「うわっ！？」だが、本当に驚くと「きゃ！？」になる。

行人は今まで、引き金を引いていた事に気付いていなかったらしく、驚いて銃を手放した。

主人から手を放されて役目を終えたV z 6 1は、ただ無機物のように地面へと落ちていった。ありがとうV z 6 1。君の活躍は忘れない。

「部長さ〜ん、戻りました」

「……戻った」

しかし、陣営には旗を護る数名の兵士しか居なかった。

部員達が集まっていた場所を見に行っても、誰も居ない。

オロオロとする行人に、放送部員だと思った1人の兵士が声をかけ
——れなかった。

肩を叩いて自分へ気付かせようとした兵士だが、その前に玉緒に腕を掴まれる。

「……行人に——触るな」

「あ、待つてタマちゃ——」

殺意を込めた玉緒の目に「え？　なんで俺殺されようとしてんの？」と疑問を浮かべた兵士だが、思考が終わった時には地面へと叩き付けられていた。

薄れる意識の中、そういえば……サバゲーが始まる前に1人の知り合いが投げられた、のを思い出していた。

口からキラキラと光る物を吐き出しながら、兵士は薄く笑いながら沈んでいった。

「きゃああ！？　だ、大丈夫ですか！？　え、衛星…違う、衛生兵く！？」

「……？」

害が無いと予め分かっている場合は、行人は介護に回る。時々一緒に町を歩いているとき、たまに起こる現象だった。

行人の容姿に引かれてナンパする男を吹き飛ばし、強引に購入を勧めるセールスを吹き飛ばし、

道を尋ねた男性を吹き飛ばし——怒られた。

「……ごめんなさい」

相槌を打って、行人の行動と今までの経験から、この人は大丈夫と自己判断できるようになったらしい。

しゅんと小さくなる玉緒に、行人はため息をつく。

今までに50回はこんな事をしている。それでも少しずつ……本当

に少しずつだが勉強しているので許してあげる。

——地面に叩き付けられた兵士は、怒るかも知れないが…。

「あ、行人先輩。どうしました？」

「小春ちゃん！！ 良い所に…… 気絶したこの人を看病してくれませんか？」

そこを偶然通りかかる小春。

気持ちが悪く感じている時に現れた小春は天使のようだった。

ちなみに、小春のファンの間で隠語で呼ばれる二つ名は【萌天使コハルル】【天使の幼女】【お父さんと呼ばれたい】

キラキラ光る物を口から出して失神している兵士を見て、身体をびくつと震わせる。

「……ど、どうしたらこんな風になるんですか…？」

「多分、解体用の鉄球をお腹に喰らったら……かな？」

「それ死んじゃいますよ……」

行人の冗談にツツコミを入れながら、衛生用の水で犠牲者の口元を綺麗にする。

ある程度の異臭と汚れを取り除き、放送部のベッドに搬送する為タマちゃんに担いで貰う。

自分の責任だった事から、罪悪感で進んで運んでくれるようだ。…

…初めから手当たり次第攻撃しなくても良いのに。

ついでに放送部へ向かう途中、行人は部長と皆がどこに行つたから小春へと聞いてみた。

「部長さんですか？ ……聞いた話ですと南体育館が占領されて、部員全員が出動！って聞きました」

その言葉を聞き、行人は驚愕する。

南のポイントBが取られた。となると現在自軍の領地は――、

『ポイントA』赤の本拠地がある場所であり、B寄りの最終防衛ラインで現在大規模な戦闘が起きているらしい。

『ポイントC』渡り廊下、中庭北方面。先ほど戦闘を終えた場所。既に味方部隊が展開している。

Dにて、少数であるが応戦して居る者も居るらしいが戦況も苦しくいずれ降伏するだろう。

よってこの2つしか無いらしい。

「そんな……次にボクが出来る事を聞きに行かないと……」

「部長さんは南体育館周辺に居るそうです。あの……気をつけて下さい」

「……着いて行く」

思い立った行人は、放送部から出て行く。

心配するかの様に、玉緒もデザートイーグルを抜いて後を追った。

小さい声ながらも行人の身を案ずる小春は、2人が見えなくなるまで見届けていた。

「……行人さんも忙しそうな人になりました」

第3話・腹ペコ超人の無双録（行人 玉緒）（後書き）

【次回】

時間は少し巻き戻る。

撮影班のとある2人の物語。

撮影道具を持ち、銃を持ち、イベントとして収録する戦場へと駆け出していく。

全く進んでいない物語は、他者からはどう映るのか……！？

（！注意！ 2人にも戦闘を体験してもらいます）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3564v/>

サバゲー & 放送部 ～サバ味噌定食～

2011年9月4日23時51分発行